

〔研究ノート〕 中華民国期の出版データの推計

— 「民国図書数拠庫」をもとに —

比護彦

一 はじめに

書籍の出版点数がどのように推移したのかという統計は、出版史や読書史、メディア史におけるもつとも基本的なデータと言えるだろう。こと中国については、上海を中心に活発な出版活動が行われるようになった中華民国期（一九一二—一九四九）に関する重要な研究が多く出ているにもかかわらず、この時期を通じた変化を見ることができない基本的な出版統計は見つかっていない。特に南京に首都がおかれていた時期（一九二七—一九三八）には近代的な政府機構がかなり整備されていたことを考えれば、果たして国民政府の内部で本当に

統計が採られていなかったのかは疑わしい^(一)。ただ、少なくとも公刊史料集や『中国出版通史』などの主要な二次文献には掲載がない^(二)。対照的に、中華人民共和国の成立（一九四九年）以降については、その数字をどこまで信頼できるのかという問題はともかくとして、かなり詳細な政府統計が揃っている^(三)。それゆえに、資料状況の制約により、一九四九年前後の連続的な分析が阻まれているのが現状である。

本稿では、まず第二節でこれまでの研究で使われている民国期の出版統計にはどのようなものがあるかを整理したうえで、第三節でデータベース「民国図書数拠庫」を使った筆者による出版データの推計を示した

	'27	'28	'29	'30	'31	'32	'33	'34	'35	'36
商務印書館	842	854	1,040	957	787	61	1,430	2,793	4,293	4,938
中華書局	159	356	541	527	440	608	262	482	1,068	1,548
世界書局	322	359	483	339	354	317	571	511	391	231
全出版社	*	*	*	*	*	*	*	6,197	9,222	9,438

表1 王雲五「十年来的中国出版事業」(1937)

	'02	'03	'04	'05	'06	'07	'08	'09	'10	'11
種	15	51	35	49	111	182	169	126	127	141
冊	27	60	103	142	205	435	261	420	389	583
	'12	'13	'14	'15	'16	'17	'18	'19	'20	'21
種	132	219	293	293	234	322	422	249	352	230
冊	407	565	634	552	1,169	641	640	602	1,284	773
	'22	'23	'24	'25	'26	'27	'28	'29	'30	
種	289	667	540	553	595	297	456	451	439	
冊	687	2,454	911	1,049	1,210	535	544	724	703	

表2 李澤彰「三十五年来中国之出版業」(1931)

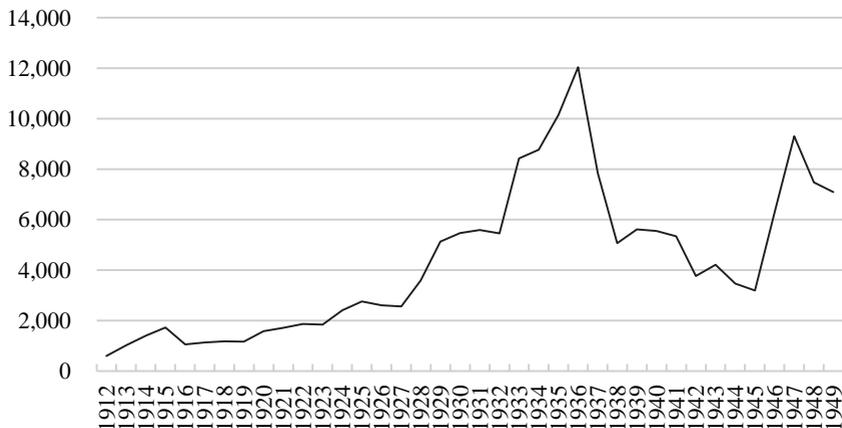


図1 民国図書数拠庫による年ごとの出版点数

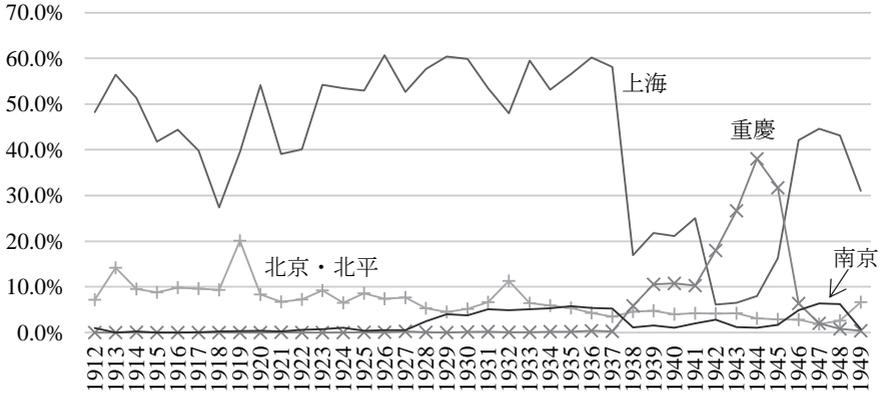


図2 それぞれの出版地の出版点数が全体に占める割合

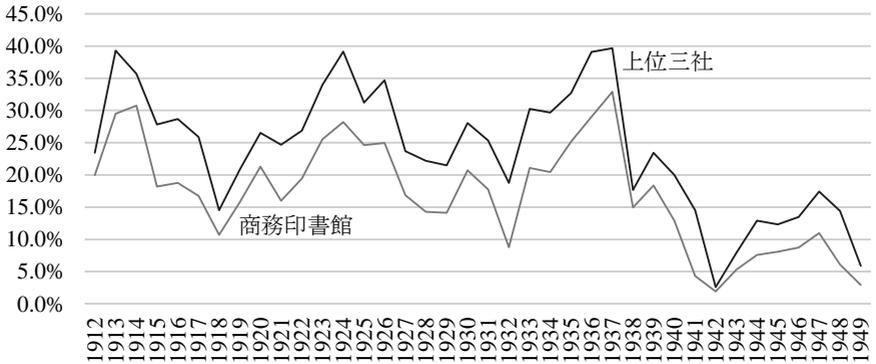


図3 全出版点数に占める大手三社および商務印書館の割合

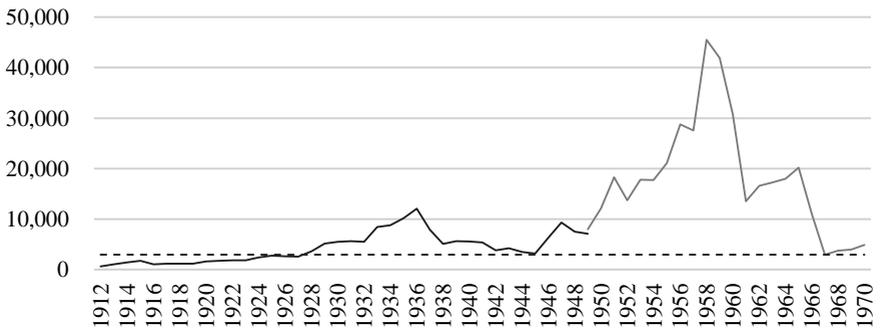


図4 年ごとの出版点数（民国期～人民共和國期）

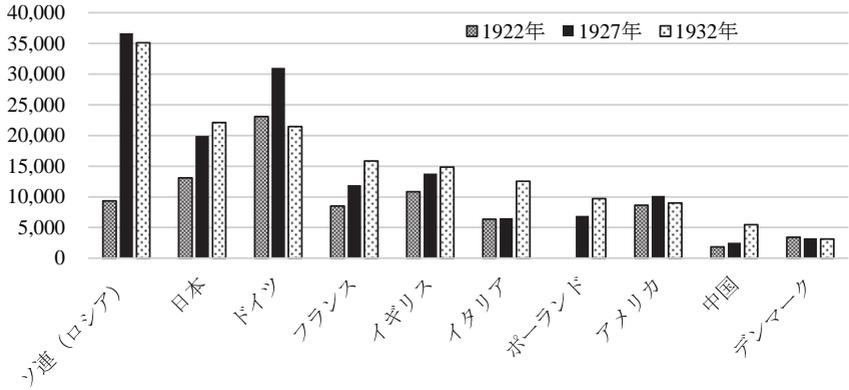


図5 各国の出版点数（中国以外のデータは日本の『出版年鑑』による）

い。そのうえで、第四節ではこのデータから何が読み取れるのかということ、いくつか例示することにする。

なお、本稿において、「出版点数」を「ある年に何種類異なるタイトルの書籍が出版されたかを表す数値」、「発行部数」を「ある年にすべて合わせて何冊の書籍が印刷されて売り出されたかを表す数値」として定義する。特記しない限り、雑誌はこれらに含まれない。後述するように、民国期については発行部数を知る手掛かりはほぼなく、基本的には出版点数の年ごとの推移に本稿の関心がある。

二 民国期の出版統計の現状

(一) 当時の統計

民国期の出版について論じた先行研究で、どのような統計資料が使われているかをまずは整理することにしたい。まずは、民国期における同時代に取られた統

計が二種類ある。

一つ目が、『十年来的中国』（一九三七年）が初出の王雲五による「十年来的中国出版事業」である（表1、以下「王統計」）^四。「二方で比較的大きい出版社に直接調査するとともに、他方で南京、上海、北平（引用者注：一九二八年から四九年までの北京の旧称）、天津の複数の主要日刊新聞に一年間に掲載された新書広告から割り出した」ものであり、大手三社である商務印書館、中華書局、世界書局については一〇年分（一九二七—三六）、全体については三年分（一九三四—三六）のみ出版点数を集計したものである。

二つ目は、『最近三十五年之中国教育』（一九三二年）が初出の李澤彰による「三十五年来中国之出版業」で、当時の最大手の商務印書館のみについて、雑誌を含む数字として、一九〇二年から三〇年までを出版点数を集計している（表2、以下「李統計」）^五。なお、一九二七年からの四年間については王統計とも重なるが、数字には大きなずれがある（網掛け部）。また、李は全

体の傾向について、「新書の出版が前の年より減つていたり、後の年より多かつたりする年があるが、前者の大部分は戦乱に関係するものであり、後者は大部の予約書や大部の単行本がその年度に出版されたことによるものである。概ね、毎年出版される新書の量は、均等に増えて行っている」と注釈している。

（二）『民国時期総書目』

『民国時期総書目』とは、北京図書館（現・国家図書館）、上海図書館、重慶図書館の蔵書をもとに約十二万四千種を収録した目録である。「解放（引用者注：中華人民共和国の成立）以来の出版事業が盛んであることを説明するために、データを引用して新旧の対比をする必要がしばしばあった」ことから、一九六一年に文化部出版局が作業に着手し、文化大革命の中断をばさんで、一九七三年に作業を再開して、一九八六年から一九九五年にかけて出版された^六。

その網羅性について、編纂に携わった王潤華は、「語

言文字」と「外国文学」の二つのジャンルに含まれる書籍タイトルについて、この『民国時期総書目』を一九三五年に出版された『生活全国総書目』と対照させ、たうえで、『生活全国総書目』に収録されたものうちの約九〇%が『民国時期総書目』にも収録されていると判断している⁷⁷。他方で、典拠が明記されていない別の文献によれば、『民国時期総書目』には民国期に発行された書籍のうち約六〇%のタイトルが収録されているという⁷⁸。

この『民国時期総書目』をもとにして、「語言文字類」のみ、あるいは日本語からの翻訳書のみを抽出して出版点数を集計した先行研究がある⁷⁹。しかし、全二〇冊に及ぶため、このようなジャンルごとの集計はともかく、全体的な出版点数の年ごとの推移を集計することは独力ではほぼ不可能である。

(三) 『百年書目』

『百年書目』とは一九九七年に商務印書館が出した

CD-ROMであり、筆者は入手できていないが、商務印書館の研究者である李家駒によれば、「商務の出版量を統計するための最も網羅的で最も使いやすい材料である」という⁸⁰。これをもとに李が集計したものは、商務印書館のみとはいえ、民国期の全期間を通じた出版点数の統計である(以下、「百年統計」)。前述した同時代の統計よりも商務印書館の出版点数をかなり少なく見積もっており、「王雲五や一部の学者は商務の出版量が全国の半数を占めると言っていたが、これは当たっておらず事実から離れている」と李は指摘している⁸¹。

(四) その他

複数の資料では、民国期の出版のピークが一九三六年にあり、出版点数が約一萬種、発行部数が約一億七千万冊であったとしている。一年のみとはいえ、出版点数だけではなく発行部数もわかるという点で貴重だが、出典が明記されておらず、信憑性は不明である⁸²。

三 「民国図書数拠庫」のデータ

前節で確認したように、民国期の出版に関わる統計資料には複数のものが既にあるものの、いずれも全出版社を合わせた出版点数が民国期を通して年ごとどのように推移したのかを知ることができないものではない。

そこで本稿では、近年作られたデータベースである「民国図書数拠庫」をもとにして、新たに当時の出版データを推計することを試みる。このデータベースは、二〇一一年から進められた「民国時期文献保護計画」の成果の一部として整備されたもので、国家図書館を主として全国の図書館等から民国期の図書が収録されており、全文検索も可能である。民国期の文献の劣化が進んでいることや、政治的にも「民国熱」が高まっていることが、この計画の背景にはあるだろう^(二三)。

このデータベースは二〇一五年に公開されて以降も

随時データの更新が行われており、本稿は現時点で最新のものである第五期（二〇一九年）のものに依拠している^(二四)。この第五期のデータベースの説明書きによれば、二〇万種を収録して、総ページ数は三千五百万部、総容量は三・八TBに及ぶ。前述した『民国時期総書目』（十二万種）と比べると、全体数が増加するとともに、図書分類も一部変更されたうえで新たに分類分けされている^(二五)。何よりも、電子的なデータベースになったことで、使い勝手がなお悪い部分もあるとはいえ、統計処理が容易になった。

筆者は、出版年が確定できないもの（記載なし、または複数年が記載、一九一一年以前または一九五〇年以降のもの、日文（日本語）図書（二五、八四七点）を除外した上で、一六五、四九六点を集計対象として、出版年ごとに集計した（図1、以下「新統計」）。この集計対象は、データベース全体の一八三、七三七点のうち、九〇・一％に相当する。なお、分冊及び重版も特に区別することなく数えた。このデータのエクセル

版は筆者の researchmap 上で公開する。

この新統計は、民国期当時で作られた統計を含め、これまで使われてきた統計のどれよりもデータの総数が多く、民国期の出版状況を把握する上での網羅性を証すると言えよう。とはいえ、当時出版された書籍で、現存していないものも多いだろうし、とくに古い時期や戦争中のものは残りにくい可能性を考えれば、当時の出版データを完全に再現するものでは当然ない。そこで、データの信頼性を確認するために、商務印書館発行のものに限り、この新統計による出版点数を前述した王統計、李統計、百年統計のものと比較したが、絶対数としてはかなりの差が見られた（例えば、一九三〇年は、王統計・九五七冊、李統計・四三九種・七〇三冊、百年統計・四七七種、新統計・一、一三四点。ここから、分冊や重版をどのように数えるかなどの集計の基準や調査手法は相互に大きく異なり、別種の統計の数値を単純に比較することにはほとんど意味がないことがわかる。とはいえ、相互に強い相関が見られ

たので、増減等のおおまかな傾向を捉えることは可能であると判断して、次節では限界に留意しつつ、複数の観点により新統計のデータから読み取れるものを提示してみたい。

四 データから読み取れるもの

(一) 出版点数の変化の画期

民国期の出版点数の変化について、図1から概ね次のような時期区分が可能である。

- ① 一九二二—二七…緩やかな増加
- ② 一九二七—三六…急速な増加
- ③ 一九三六—四五…減少
- ④ 一九四五—四七…増加
- ⑤ 一九四七—四九…減少

一九二七年前後を境として出版点数の増加が加速するというのは①→②、その頃から出版業が盛んになったとする同時代の雑誌の記述と一致するものであり

二七、これをデータにより確認することができた。ピ
ークが一九三六年であることはこれまでも指摘されて
いたとおりであり、その後、日中戦争の勃発により大
幅に減少する(②↓③)。④と⑤の変化は、日中戦争の
終結と第二次国共内戦の勃発に伴うものである。

(二) 出版の中心地の変化

図2は、各都市で出版された図書の出版点数が全体
の中で占める割合の変化を示したものである。民国期
の出版の中心地が上海であることは、これまでも多く
指摘されてきたとおりであるが、全体を通したその割
合の大きさが改めて確認できるだろう。

なお、同時代の雑誌の記事には、五四運動(一九一
九年)前後の出版業の中心が北京であり、北伐が進展
した一九二〇年代後半になってから上海に移ったとす
るものがある(二八)。しかし、出版点数から判断する限
り、確かに一九一九年に一時的に北京の割合が増える
ものの、一貫して上海の割合が北京・北平を大きく上

回っていたことが確認できる。

日中戦争中には、上海に代わって戦時首都である重
慶へと中心地が移動することも見て取れる。

(三) 大手三社(商務・中華・世界)が占める割合

図3は、全出版点数に占める大手三社及び商務印書
館の割合の変化を示している。年ごとの増減はあるも
の、日中戦争勃発以前は大手三社が概ね二割から四
割のシェアを維持していたこと、その中でも商務印書
館のシェアが圧倒的であったことが見て取れる。

なお、一九三二年の雑誌の記事には「小書店」が「大
書店」の独占を打破したとの記述があるが(二九)、大
手三社が全出版点数に占める割合については、明らか
な低下を認めることはできない。ただし、出版点数全
体が増加していたため、絶対数としては中小出版社の
出版物が増えたことになり、それにより選択肢が増え
たという印象はあったのかもしれない。

また、商務印書館が全体に占める割合について、五

割程度と見積もった王統計に対して、過大だとした李家駒の指摘を裏付ける結果となった。

(四) 人民共和國期（特に文革期）との比較

前述したように、出版点数の絶対値は集計基準等によっても大きく変わるため、性質が異なる統計を比較することは、本来は不適切である。しかし、中華人民共和國が成立した一九四九年に着目すると、新統計で七、〇九七点、人民共和國の政府統計で、八、〇〇〇点となり、かなり近い。このことから、大まかな規模を比較する限りでは、基準が一致していると仮定して、参考までにつなげて図示したのが図4である(一〇)。

この仮定が正しいとすれば、出版点数が底を打った文革中の一九六七年の水準（点線で表示）は、民国期の出版点数増加の転機となった一九二七年、そして日中戦争が終結した一九四五年とほぼ同程度であったことになる。

(五) 国際比較

図5は、日本の『出版年鑑』（東京堂）各年版による各国の出版データに、今回の中国の新統計のデータをあてはめたものである。(四)と同様、あくまで参考程度の比較となることに注意されたい。ただし、特に日本と比較するとき、日本よりも中国の方がはるかに人口が多かったにもかかわらず、出版点数は日本の方がかなり多く、統計の誤差がある程度あったとしても、なお出版市場の規模に大きな差があったことが分かる(一一)。それでも、当時の中国の雑誌には、日本の「出版洪水」に言及したうえで、同様の状況が中国で起きているという言説があった(一二)。

五 おわりに

本稿では、民国期中国の出版状況を通時的に捉える統計がない現状を踏まえて、データベース「民国図書数拠庫」を用いて出版点数のデータの推計を試みた。

様々な限界があることは既に記したとおりであるが、当時の出版史や読書史、メディア史などの研究を進めるうえで一つの出発点を提供することになれば幸いである。

また、本稿では十分に紹介できなかったが、「民国図書数拠庫」は、民国期の図書を全文検索できる非常に有用なデータベースであり、多方面での歴史研究に活用し得るものである。日本国内ではまだ契約している図書館がないが、民国史研究の発展のためにも導入が望まれる。

・本研究はJSPS科研費20J20573の助成を受けたものである。

(二) 本来であれば南京にある中国第一歴史档案馆などの調査を十分に行って確認をすべきであろう。しかし、新型コロナウイルス感染拡大に伴う入国制限や、近年の外国人研究者の資料閲覧への制約など、調査が困難な状況が続いているため、ひとまず現時点で入手できた資料を基にした暫定的な結果を示すことにした。

(三) 王余光・吳永貴『中国出版通史 8 民国卷』中国書籍出版社、二〇〇

八年。

③ 宋原放主編『中国出版史料 現代部分 第三卷 下』山東教育出版社、二〇〇一年、五三―五五頁。

④ 王雲五『五十年来的中国出版事業』一九二七―一九三六年』張靜廬輯註『中国近現代出版史料 現代編』上海書店出版社、二〇〇三年、三三五―三五五頁。後述の『三十五年来中国之出版業』のように「冊」と「種」は区別されるが、ここでの単位は「冊」である。許敬はこれを出版点数ではなく発行部数のことであると解釈して、千冊単位と推定しているが、原資料に全く記述がなく、不自然である(許敬『中国閱讀通史 民国卷』時代出版传媒股份有限公司・安徽教育出版社、二〇一七年、八〇頁)。当時の目録には、全集など分冊に分かれているものに「全〇冊」という表記が見られることから、「種」「冊」ともに出版点数のことで、分冊をまとめて一つと数えるのが「種」、分けて数えるのが「冊」であると筆者は考える。

⑤ 李澤彰『三十五年来中国之出版業』二八九七―一九三二年』張靜廬輯註『中国近現代出版史料 現代編(下)』上海書店出版社、二〇〇三年、三八―三九四頁。

⑥ 王潤華『編纂《民国時期總書目》的緣起与經過』《中国出版》一九九一年第21期、八―八四頁。

⑦ 邱崇丙『民国時期總書目』述評『北京圖書館館刊』一九九五年21期、一〇八―一五頁。なお、『生活全國總書目』は民国期に出版された比較的網羅的な書籍目録ではあるが、発行年である一九三五年以降の出版物について知ることはできない点、またこの目録にはそれぞれの書籍の出版年の情報を書かれていない点から、民国期における年ごとの出版点数の推移を推計するために使うことはできない。

⑧ 許、前掲、七九頁。

⑨ 邱崇丙『民国時期圖書出版調查』《出版史研究》第一輯、中国書籍出版社、一九九四年、一六三―一七四頁、王寿生『民国時期的日書漢訳』近

代史研究』二〇〇八年第六期 四五—六二頁。

(一〇) 李家駒『商務印書館与近代知識文化的傳播』商務印書館、二〇〇五年、一五一頁。

(一一) 同右、一六一頁。

(一二) 「文化部党组関于『出版社内組織編輯工作的經驗』稿請中央宣傳部審批的報告」(一九五七年)『中華人民共和國出版史料』第九卷、中國書籍出版社、二〇〇四年、九二頁、方厚板『中國出版史話』東方出版社、一九九六年、三二九頁。

(一三) 淺野基生「中国で動き出した『民国時期文獻保護計画』、『アジア情報室通報』第一卷第 三 号、二〇一三年、一七—一七頁、李強「『中国歴史文獻総庫、民国図書数拠庫』建設的経験与体会」『上海高校図書館情報工作研究』二〇一八年第三期 三三—三三頁、Zhang Qiang and Robert Weatherly, "The Rise of Republican Fever" in the PRC and the Implications for CCP Legitimacy," *China Information*, 27 (3), 2103, pp. 277-300.

(一四) 新型コロナウイルス感染拡大のために中国国家図書館が閉館していた時期、一時的に館外からのオンラインでアクセスできるデータベースの範囲が拡大し、日本からも『民国図書数拠庫』へのアクセスが可能になった。本稿の調査はその時期(二〇二〇年四月頃)に行ったものである。本来であれば執筆時点の最新のデータを反映させるべきではあるが、現在は再び当該データベースへの日本からのアクセスが出来なくなっている。二〇二二年一月現在の時点で、第五期(二〇一九年)のデータベースが依然として最新のものであることは確認できるが、調査時以降に小規模な変更が加えられた可能性は否定できない。

(一五) 日本文書という分類もあり、本稿のテーマからはずれないが、日本語の中国(へ)の影響を捉えるうえで興味深いデータが取れる。

(一六) 新統計との相関係数はそれぞれ以下の通り。王統計 $r=0.95$ 、李統計(種) $r=0.80$ 、李統計(冊) $r=0.50$ 、百年統計 $r=0.94$ 。こずれも有意な

相関がある($p < 0.01$)。

(一七) 若虚「昨日今日与明日的『新書業』」『中国新書月報』創刊号、一九三〇年一月、一頁、古樸鋒・華狼公「先天不足後天失調の現代出版界」『中国新書月報』第一卷第 六・七期合刊、一九三二年六月、一—一頁。

(一八) 儲安平「一年来的中国出版界」『讀書雜誌』第四期、一九三五年一月、一三一—一四頁。

(一九) 編者「從採書的困難談到本刊底任務」『書報評論』第一卷第一期、一九三二年一月、一頁。なお、五四運動後に新しく生まれた中小出版社であるいわゆる『新書店』については、Ling Shiao, "Culture, Commerce, and Connections: The Inner Dynamics of New Culture Publishing in the Post-May Fourth Period," Brokaw, Cynthia Jeanne and Christopher A. Reed, *From Woodblocks to the Internet: Chinese Publishing and Print Culture in Transition, 1800 to 2008*, Leiden: Brill, 2010, pp. 213-247 を参照。

(二〇) 中華人民共和国の出版統計の出典は、宋、前掲。

(二一) 当時の中国の人口は約四億六千二百万人(『申報年鑑』一九三五年版)推計、日本の人口は植民地を含め約九千七百万人(うち内地六千九百万人、一九三五年国勢調査、『日本帝國統計年鑑』一九三六年)であり、約四・七倍の差があった。

(二二) 高峯博「読書能率底増進法」『読書月刊』第一卷第五期、一九三二年一月、三八—三九頁。この点について、比護通「消費する読者への政治的期待——一九三〇年代中国の読書雑誌を手掛かりに」『マス・コミュニケーション研究』第九八号、二〇二二年、六九—八六頁を参照。